

- ◆ 2017年11月8日発行ラインナップ
- ・ 2017年水稻作況指数 100
- ・ 鳥取、北条砂丘芝のご紹介

# 2017年水稻作況指数 100

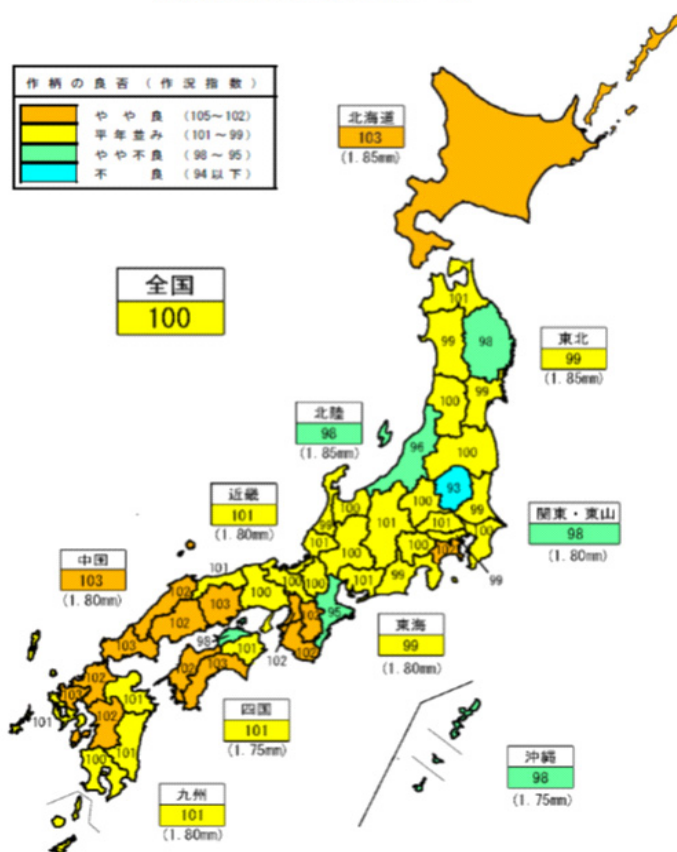
## ～9月報と変わらず

農水省は10月15日現在の水稻の作況指数を発表、9月15日時点での発表と変わらず作況指数は100となった。九州や関東北の麦跡栽培も50%以上は刈り取りされた段階なので、この報告値はほぼ全国の結果が出たものと言えるだろう。これにより子実用の全国の収穫量は782.5万トンとなり昨年よりも21.7万トン減、うち主食用の収穫量は730.9万トンとなり昨年よりも18.7万トン減が報告されている。また全国の平均反収は534kgとなり、昨年よりも10kgダウンの結果は9月報に引き続いた結果となった。地域別にみると、昨年の豊作年よりも収量が増加した地域は北海道、中国、九州・沖縄地方となった。逆に収穫期以降の日照不足と低温の影響を受けた岩手・宮城・新潟・栃木は県内での作柄表示別地域においては95を割る地域も見られる厳しい年となった。数値通り新潟・栃木では早生～中生品種が昨年よりも1.5俵前後平年よりも取れなかったという生産者の声が聞かれる。篩別の分布データを見ると、昨年よりも収量が減少している地域の整粒歩合は2mm以上の整粒が減少している場合が多く出穂後の天候が如何に大事か伺える。来年も同じような天候となるかは神のみぞ知るという所であるが、低温・日照不足が予測される年回りについては今年の経験を生かして来年の施肥や栽培管理等で生産者にアドバイスが出来るのではないだろうか。

当紙誌505号で紹介したエムシー・ファティコム(株)アミノ・ミネラルグループが主催した全国ハイグリーン研修会にて講演頂いた農研機構の八木一行博士によると、高温で多湿、日照不足に見舞われた地域では中干しの徹底と追肥を軽めに行うことで籾数を調整し乳白粒を減少させるといった管理方法が紹介されている。今年は地域によって2パターンあり5月の天候に恵まれた栃木県等のように1週間以上も早く生育が進み過繁茂となった地域と、新潟や山形等の日本海側のように5月

(次ページへ続く)

図2 全国農業地域・都道府県別作況指数(10月15日現在)  
【農家等が使用しているふるい目幅ベース】



注：1 作況指数は、全国農業地域ごとに、過去5か年間に農家等が実際に使用したふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでの目幅(北海道、東北及び北陸は1.85mm、関東・東山、東海、近畿、中国及び九州は1.80mm、四国及び沖縄は1.75mm)以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

注：2 徳島県、高知県、宮崎県及び鹿児島県の作況指数は早期栽培、普通期栽培を合算したものである。また、沖縄県の第二期稲は未確定の要素が多いことから、沖縄県計の作況指数の算出には、第一期稲の10a当たり収量と第二期稲の10a当たり平年収量を用いた

(前ページより続く)

の降雨と低温により分けつ数が確保出来ず中干し作業を遅らせて莖数の確保に努めた地域があった。本来梅雨明けには夏空がやってきて天候に恵まれるのだが、梅雨明け宣言後に降雨が続き、中干し作業が甘くなってしまった地域では屑米の発生が例年よりも高いという話を多く聞いている。また、元肥で一発肥料だけを使った生産者からは葉色が落ちずにいつまでも田んぼは青かったという評価も多く聞かれた。このような年回りでは元肥での一発肥料は被覆窒素肥料の発現が遅くなり屑米発生を誘発してしまった事例ともなりうる。元肥一発肥料を利用される方々の多くは田んぼに入りたくないといった意見を持たれる方々が多いので、栽培中期での肥培コントロールをも省いてしまいがち。然しながら、ここは敢えて登熟を促進させるケイ酸マグネシウム肥料等、補助的な役割を担う資材を薦める良いきっかけとなろう。平成30年は1反当たり7.5千円の補助金が廃止され、減反政策も見直しされるが、主食用米の米価は上昇しており、生産者の生産意欲は高まることが期待される。このような機会だからこそ肥料商は、コメ流通のトレンドや需要の動向を見極めた栽培品種を提案し、また原点に立ち返って生産者の手取りを増やすべく増収技術を伝え実践することで、生産者に信頼され選ばれるパートナーとなることが求められている。

表1 ふるい目幅別重量分布状況の推移

年 産	計	単位：%					
		1.70mm以上 1.75mm未満	1.75 ～1.80	1.80 ～1.85	1.85 ～1.90	1.90 ～2.00	2.00mm 以上
平成24年産	100.0	0.6	1.0	1.5	2.2	13.0	81.7
25	100.0	0.8	1.3	1.9	2.7	14.5	78.8
26	100.0	0.8	1.4	2.0	2.7	14.7	78.4
27	100.0	0.8	1.4	2.0	2.7	15.3	77.8
28	100.0	0.7	1.2	1.7	2.4	14.0	80.0
29(概数値)	100.0	0.9	1.5	2.1	2.9	16.2	76.4
平均値	100.0	0.7	1.3	1.8	2.5	14.3	79.4
対平均差(%)	0.0	0.2	0.2	0.3	0.4	1.9	△ 3.0

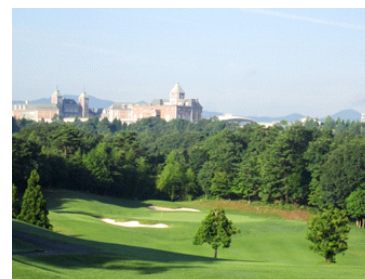
注：1 平均値は、直近5か年の重量割合の平均である。

注：2 未熟粒・被害粒等の混入が多く農産物規格規程に定める三等の品位に達しない場合は、再選別を行っており、その選別後の値を含んでいる（以下同じ。）。

## 鳥取・北条砂丘芝のご紹介

鳥取県は日本海に面した豊かな自然を背景に二十世紀梨・スイカ・魚・松葉がになど海の幸、山の幸が豊富にあり、海岸部では砂丘らっきょうを生産しています。今回ご紹介するのは、(株)チュウブが生産を手掛けている北条砂丘芝です。

鳥取県中部の北条砂丘地帯に広がるキメの細かい良質の砂丘地は天然の砂圃場で広さは13万平米。同社の一貫した生産管理、施肥・頭刈り・除草など長年の経験と豊富なノウハウを生かして丁寧に栽培・出荷されています。芝は高麗・ベントなどの品種がありますが、ティフトン芝に



力を入れています。ティフトン芝は西洋芝の部類に入りますが、一般的な寒冷地型ではなく暖地型の西洋芝で、魅力は成長が早く踏圧やすり切れなどからの回復が早い特長があります。また、同社はオリジナル商品として、ティフトン419EMR ロールサンド仕様を提案、ロール状にして出荷、スタジアム等では通常品より早く施工が完了し使用が可能になるとの事。主な使用先は、国立西が丘サッカー場・味の素スタジアム・江戸川区陸上競技場など。ベント芝は、北神戸ゴルフ場・呉カントリークラブ等への実績があります。芝の専門会社として様々なイベントを開催しており、宝塚高原ゴルフクラブ所属のリチャード・テイト氏が契約プロ、また、昨年第一回神戸オープンゴルフを主催、プロとアマチュアにも競技ゴルフの場を提供しています。芝は農産物の中でも産地・エンドユーザーが限られており、なじみが薄いかもしれませんが、鳥取県から全国にロール状のティフトン芝が出荷されています。味の素スタジアム等へ足を運ばれた際には、是非美しいグリーンをお楽しみ下さい。

都内も紅葉が進み、木々が色づいてきました。少し肌寒い中の紅葉狩りも気持ちがいいですね。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp